

Title	東アジア地域に関する初期外邦図の編集と刊行
Author(s)	小林, 茂; 岡田, 郷子; 渡辺, 理絵
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 44 P.1-P.32
Issue Date	2010-12-24
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/6191
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

東アジア地域に関する初期外邦図の編集と刊行

小林 茂・岡田 郷子・渡辺 理絵

はじめに

一九四五年八月まで、近代の日本がアジア太平洋地域について作製した地図を外邦図とよんでいる。巨視的にみれば、外邦図がカバーする範囲は、日本の影響力の拡大とともに、アジア太平洋の各地域に拡大していったといつてよいが、その展開を詳細にみれば、時期や地域によって大きなちがいがあり、複雑な様相を呈している。筆者らはこの間、そのプロセスを多面的に把握することを試みてきており（小林、二〇〇六、二〇〇九、小林・岡田、二〇〇八、小林・渡辺、二〇〇九、小林・渡辺・鳴海、二〇〇九、小林・渡辺・山近、二〇一〇、渡辺・山近・小林、二〇〇九）、本稿はその一環として準備されたものである。

さて、測量にもとづいた外邦図がさかんに作製されるようになるのは日清戦争期以後であるが、明治の早期から、既存の地図の編集により作製された外邦図が見られる。幕末期まで海外渡航がみとめられていなかった日本にあって、明治初期の外国地図の作製は、既存の地図の複製か、それらの編集による以外になかった。こうした地図

を、以下では「初期編集外邦図」とよびたい。

初期編集外邦図は、その素材を反映して小縮尺のものが多く、情報そのものの新しさという点でも大きな意義はないように思われがちである。また図示範範囲も東アジアから、一部東南アジアにおよぶにすぎない。ただし、なかには広く流布したものもあり、さらに海外でその複製に近いものがつくられた場合さえみられる。これは、近代的地図が未整備であった時期の東アジアにおいては、この種の編集図が、時にはパイオニア的意義をもつことがあったことを示している。さらにこれらの地図の素材になった地図を検討すると、欧米製の海図・地図にくわえ、中国製や朝鮮製の伝統的様式の地図もみられる。近代地図と伝統地図を組み合わせて、なんとかその地域の地理情報を整備しようとした努力がうかがわれる。そして何よりも、これらの地図の整備過程を追跡すると、日本が海外の諸地域に対してもついていた関心の変化を知ることができるわけである。

このような初期編集外邦図について、その書誌情報、記載内容、さらにはその流布を検討しておくことは、外邦図の作製史を考えるに際して、意義あることといえよう。測量にもとづく外邦図作製の前段階となった、この時期の地図作製の概要を把握するには、まずこの種の基礎的作業が不可欠なのである。

なお、日本のスタンダードな地図作製史としては、『測量・地図百年史』（測量・地図百年史編集委員会、一九七〇）があるが、この種の地図については、代表的なものの名称に言及するにすぎない。またこの時期の地図作製史については、「陸軍参謀本部と地図課・測量課の事績―参謀局の設置から陸地測量部の発足まで」という共通のタイトルを掲げる佐藤（一九九一a、b、c、一九九二a、b、一九九三）があり、貴重な指摘が多い。ただし、クロノロジカルな記述のため、この種の地図について概要を知るのは容易でない。また記述が陸軍のものにかぎられ、

海軍の関与するものがふくまれていない。後述するように、この時期には海軍による地図も、外邦図のなかで重要な役割を果たしている。以下ではこうした先行研究をふまえながら、検討をすすめたい。¹⁾

一、初期編集外邦図の構成

初期編集外邦図については、現在もなお調査を継続しているところで、該当時期に作製されたことが知られている地図であっても、現物を確認できていないものが残っている。また佐藤（一九九一a、b、c、一九九二a、b、一九九三）以外に、この時期の外邦図作製を概観するような研究はほとんどなく、なお手探り状態の探索がつづいているところである。ただし、現在まで把握しているものについて、その作製時期やカバーする地域を検討すると、いくつかのグループにわけることができる。まだ暫定的な分類で、改訂の余地が大きいものであるが、まずこれを示しつつ、その構成を概観するところからはじめたい（後掲の表1～表4を参照）。

この第一は、明治六（一八七三）年頃から作り始められた外邦図で、日本の隣接地域を小縮尺の地図でカバーしつつ、その重要地域を比較的大縮尺の図で示そうとするもので、以下では「明治初期の編集図」と称することにしたい。この特色としてまずあげられるのは、朝鮮半島から中国大陸、とくに後者の北部の海岸部に対する関心が高いことである。

つぎにあげられるのは、台湾関係のもので、いうまでもなく一八七四年の台湾出兵に関連するものである。別稿（小林・渡辺・山近、二〇一〇）で指摘したように、日本軍は台湾に関連する地理情報をほとんどたず、フランス系アメリカ人、ルジャンドルの提供する情報に大きく依存した。またいずれも海軍によって準備された点に大きな

特色がある。

つづく「アジア大陸図」は、アジア大陸を広範囲にカバーする小縮尺の図で、彩色が施されているものもみられる。彩色されたものは軍事的なものというより、一般に公開されたもので、民間のアジア地域の地理的知識に対する要望に応えようとしたものである。

さらに「清国分省図」は、中国大陸の海岸部を中心に七〇万分の一の縮尺で各省の地図としたもので、時期的にみても「明治初期の編集図」に比較すれば、関心が大きくひろがったことをうかがわせる。またベトナム北部に関する図もふくまれている。

以上のような図の作製時期は、一八八〇年代前半までのものが多いが、この時期になると中国大陸や朝鮮半島で、測量が展開することをあわせて指摘しておきたい。陸軍参謀本部は、その体制が確立されると、少数の陸軍将校を各地に派遣して、簡易な測量をおこなわせ、その成果をもとに日清戦争（一八九四～五年）までに朝鮮半島から中国大陸北部にかけて二〇万分の一図を整備した（渡辺・山近・小林、二〇〇九、小林・渡辺・山近、二〇一〇）。近代的な地理情報のすくないこの地域について、日本は不十分ながら自前の地図を作製していたわけである。筆者らはこの時期について、「臨時測図部」による多数の測量技術者の測量が展開する日清戦争以後に対して、「初期実測時代」と命名した（小林、二〇〇九、小林・渡辺・山近、二〇一〇）。この成果ともいえる上記二〇万分の一図の地理情報は、「假製東亞輿地圖」（一〇〇万分の二）に集約され²⁾、一時期ながら東アジアの最新地理情報として国内・国外に受け取られたという点で注目されるが（小川、一九〇四）、同時に本稿で検討するような編集図の作製時代の終了をもたらすものであったと考えられる。もちろんこれによって既存の地理情報の編集による地図作製がまった

くなくなったというわけではないが、その意義は大きく低下することになった。

本稿で検討する地図は、したがって、一九世紀末期には現用の地図ではなくなってしまう、次第に忘れ去られていったと考えられる。上記二〇万分の一図とともに、『測量・地図百年史』でほとんど取り上げられなかったのは、このような背景をもっていることになるが、外邦図を考えるに際しては、その役割を当時の状況と照合しつつ検討する意義は大きい。

二、明治初期の編集図

明治初期の編集外邦図を表1に示している。³⁾この冒頭の「朝鮮全圖」は、日本海軍水路寮が一八七三(明治六)年十月に刊行したもので、朝鮮半島全体を図示する。その付言では、前年の春日艦の航海のみに朝鮮でえたもので、縮尺等に問題があるが、地名・島名がわかるとしている。ただしこの図は、北部の鴨緑江・豆満江上流の扁平な図形から、十八世紀中期以降になると減少する朝鮮前期の地図類型(李、二〇〇五、五〇五―五〇六頁)に属することがあきらかであり、海軍水路寮には、上記部分がより正確になる朝鮮後期の地図に関する知識が欠けていたことを示している。朝鮮半島の地理情報の不足が「よく感じられていた時期の複製図といえる。

つぎに示す「清國渤海地方圖」は、左右に大きく分かれる図で、左側は小縮尺の「渤海地方略圖」(概観図で縮尺不明)を左下におき、その上に北河(白河、海河)河口から天津、さらに北京にいたる河道(水路)を二枚の図(縮尺一四万分の一)にわけて示している。この部分のタイトルは「北河上北京道程圖」である。さらに右半分は北河河口部および運河である北塘河の河口部を示す「北河及北塘河口近傍圖」で、縮尺は四万分の一となる。

表1：明治初期の編集図

	タイトル	作製年月	サイズ (cm)	縮尺	作製機関	所蔵機関・資料番号
1	朝鮮全圖	1873.10	43.4 × 61.4	—	海軍水路寮	国立公文書館内閣文庫、175-225 など
2	清國渤海地方圖	1874.10	65.6 × 91.4	1/40,000 など	陸軍参謀局	国立公文書館、186-0002
3	陸軍上海地圖	1874.10	42.2 × 30.7	約 1/950,000	陸軍文庫	国立公文書館、ヨ 292-0101
4	北河總圖第壹、天津河口至葛枯	1875.10	71.8 × 102.1	1/31,500	兵學寮學課部 (作) 陸軍文庫 (刊)	国立国会図書館、YG913-169
5	北河總圖第貳、葛枯至天津		61.5 × 90.0			
6	北河總圖第參、天津至通州		72.1 × 102.5			
7	北河總圖第四、通州至北京		72.6 × 102.2			
8	直隸灣總圖	1875.10	73.0 × 97.8	約 1/370,000 など	陸軍文庫 ?	国立国会図書館、YG913-1964
9	遼東大聯灣圖	1876.4	52.4 × 67.8	1/73,000	陸軍文庫	国立国会図書館、YG913-2298
10	清國北京全圖	1875.4	62.4 × 42.2	1/21,100	陸軍参謀局	国立国会図書館、アジア乙 3-31 など
11	朝鮮全圖	1875.11	139 × 98	1/1,000,000	陸軍参謀局	国立国会図書館、YG913-129
12	朝鮮全圖	1876	134 × 97.6	1/1,000,000	陸軍文庫	国立公文書館内閣文庫、178-487
13	朝鮮江華島圖	1876.5	—	1/72,000	紙幣寮	国立国会図書館、2A-009-00、リール 23900
14	朝鮮八道里程圖	1882.8 ?	25.0 × 24.6 37.6 × 45.6 37.0 × 53.0 45.2 × 84.4	—	陸軍文庫 ?	国立公文書館、アジア乙 2-15

本図の大きな特色は、地名の多くが漢字ではなくカタカナで表記され、欧米製の地図が原図であったことを示している。アルファベットによる表記をカタカナになおしているわけである。この原図は、あるいは一八七三年に清国に派遣された陸軍将校の一人、益満邦介が購入した「北京白川之地圖」⁴である可能性がある。なお益満は、これらの将校のなかで、とくに地理的情報を担当した（小林・渡辺・山近、二〇一〇）。

「陸軍上海地圖」はサイズの小さな図で、縮尺も小さく上海と太湖を中心に江蘇省南東部と浙江省北東部を描く。図の右上に配置された文言より、この元図は一八六五年に「陸軍地理課」が印刷刊行したものであったことがわかる。その末尾で「陸軍地理課」の「長官」を「ヘンリー・ゼームス」とするところから、この地図作製機関は、Henry James (1803-1877) が長らく長官を務めたイギリスのオードナンス・サーベイであることがあきらかである (Seymour ed. 1980, 158-167)。陸軍部隊による一八六二年からの測量の経過のほか、「官音」と「土音」がある地名表記の難しさについても付記する。なお本図にみえる地名の表記はカタカナに漢字を添える場合が多く、一部にカタカナのみ、あるいは漢字のみの場合もみられる。また右下の文言で、川上寛（一八二七—一八八一年、近代初期の地図作製に大きな役割を果たした画家）の作図であることを示している。

つづく「北河總圖」は、上記「清國渤海地方圖」と同じ地域を図示するが、それよりは大きな縮尺（三一五〇〇分の二）で、全四枚よりなる。第一図より順に北河をさかのぼり、第二図で天津に至り、第四図で北京に達する。各図で原図に関する注記を付し、第一図はフランス、アメリカ、イギリスの測量成果、第二図はフランス・イギリス、第三図、第四図はイギリスの測量の成果によるものようである。一部をのぞき、測量者の姓も示されており、そのなかにはジョン・ウォードのように、日本周辺の測量史 (Pascoe, 1972, ビーズリー、二〇〇〇など) に登場

する者もいる。

この地名の多くは「清國渤海地方圖」と同様にカタカナで示されるが、大きな行政地名は漢字が当てられ、その現地読みもカタカナで示される。またこれらのカタカナは、「清國渤海地方圖」にみられるものと一致せず、図の一部の描き方もふくめて、もともと原図がちがっていたことをうかがわせる。なお、時期はやや遅いが、一八七四年八月に上記益満邦介のほか、向郁、嶋弘毅（いずれも陸軍将校）が天津地方に「地形見分」のためでかけており、漢字地名はそのときに調査された可能性もある。なお、この図を兵学寮学課部が作製した背景はよくわからない。

つづく「直隸灣總圖」、および「遼東大聯灣圖」もこの地域に関連する。前者は、直隸湾から遼東湾にかけての海岸部を大きく図示するとともに（縮尺約三七万分の一）、図の左から上にかけて、同海岸に流入する五つの河川の河口部を小図で示す（縮尺約七万三千分の一、磁北の表示もある）。ただし天津に通じる北河の河口部は示されていないのは、「清國渤海地方圖」やさらくわしい「北河總圖第壹一」があつたからであろう。なお、「北河總圖」と「直隸灣總圖」は同時に印刷されたようである。⁶⁾

他方、「遼東大聯灣圖」は、このような編集図の形式をとらずに、大連湾の海図そのものである。文言には、イギリスの測量船、「アクチーン号」、「ドブ号」によるもので、司令官をジョン・ワードとしている。⁷⁾ また、経緯度測量の参照点を上海としていたことにふれている。

以上からあきらかなように、これらの図はいずれも欧米製の海図・航路図をもとにしている。各地の水深を漢数字で示しているのはその反映である。また渤海湾から北京にいたるルートに対する関心が強い点も注目される。

このような関心は、「清國北京全圖」にもつながっているとみてよいであろう。図の中央から下部に城壁に囲ま

れた北京を描くとともに、上部左側には横長の「圓園略圖」を示している。右上部分に示された文言によれば、本図はイギリスで刊行された測量図のほか、「京師城内図」、「唐土図」、「會等所図」を参照するとともに、益満邦介が北京で目撃したことにより修正を加えたとしている。このうち「唐土図」は、日本で江戸時代刊行されていた『唐土名勝圖會』⁸⁾と考えられる。益満は上記「北京白川之地圖」にくわえ「清國北京圖」も現地で購入しており、各種の資料を集成したことになる。

こうした集成が本格的におこなわれたのは、つぎの「朝鮮全圖」である。中央部に朝鮮半島を百万分の一の縮尺で示すこの図は、例言に示された時期から明治八（一八七五）年刊とされることが多いが、同年版と翌明治九（一八七六）年版では、内容にちがいがあはれることにまず注意する必要がある。広く流布しているのは明治九年版で、この特色は左右の小さな囲みに「大同江」（二〇万分の一）、「漢江口」（二〇万分の一）、「ユンヒン湾」（二〇万分の一、元山付近）、「釜山浦」（二二万二千分の二）と重要地域をやや大縮尺で示す点にくわえ、京畿道など各道のまわりを彩色する点などにある。これらは明治八年版にはみられない。

両者の素材となった情報については、左下の「例言」でつぎのように述べている。

此圖ハ朝鮮八道全圖大清一統輿図、英米國刊行測量海圖等ヲ参訂シ之ニ加フルニ朝鮮咸鏡道ノ人某氏ニ就キ親シク其地理ヲ諮詢シ疑ヲ質シ謬ヲ正シ以テ製スル所タリ

まず海岸線や経緯度は、イギリスやアメリカの海図によったことが明らかである。また海岸や島のところどころに西欧語のカタカナ表記の地名がみられるのは、測量者が現地名を確認せずに命名したものを、そのまま転載したものと考えられる。こうした西欧語の海岸付近の地名は、本稿の対象からはずれるが、海軍水路寮が一八七六年に

刊行した、ロシアとイギリスの海図による「朝鮮東海岸圖」⁹⁾だけでなく、ロシアとイギリスの海図の地理情報に比べ、日本の測量艦の成果もあわせて、海軍水路局が一八八二年に刊行した「朝鮮全岸」¹⁰⁾にもみえている。またすでにふれた「遼東大聯灣圖」でも同様である。

さらに注目されるのは、中央の図および左下の「漢江口」の囲みにみえる江華島から漢江、さらにソウルにいたる部分が一八六六年のフランス艦隊による偵察測量の成果を反映している点である(図1)。これはフランス艦隊の海図の成果を取り入れたアメリカの海図を参考にしたものであろう。¹¹⁾

これに対し、内陸部は朝鮮や清国の伝統的地図によっている。「朝鮮八道全圖」は、類似の名称の図が多くあり、実際に使用したのはどの図になるか検討を要する。「朝鮮全圖」の詳細さを考えると、一枚の図に朝鮮全体を描くような図ではなく、「東國地圖」(一八世紀中期)のように(李, 二〇〇五、一〇六一―一七頁)、朝鮮の各道が、別々の図にくわしく書かれたものであったと考えられる。他方、「大清一統輿圖」は「皇輿全覽圖」(一八世紀初頭)の系統を引くものと考えられ、「皇朝中外壹統輿圖」(一八六三「同治二」年刊)がそれにあたるといわれるが(趙・楊, 一九九八、一三八頁)、図が粗すぎ、また朝鮮国境も示されておらず、他の地図をさらに検討する必要がある。

くわえて、地理に詳しい咸鏡道出身者の協力も得ていた点も注目される。この人物はW.E. Griffithsの*Corea, the Hermit Nation*がぞれぞれのKin Rinschio¹²⁾(Griffiths, 1882, p. 213 および付図の注記)、金麟昇というウラジオストクの近隣に居住していた朝鮮人知識人であった(崔, 一九七八、頁、一九九七)。金は一八七五年六月に来日し、「お雇い外国人」として情報提供を行い、翌年には江華島条約の締結を行った黒田清隆の外交団に随行した。

なおこの「朝鮮全圖」は、そのご日本政府内だけでなく、外国人にも広く利用されることになった。上記

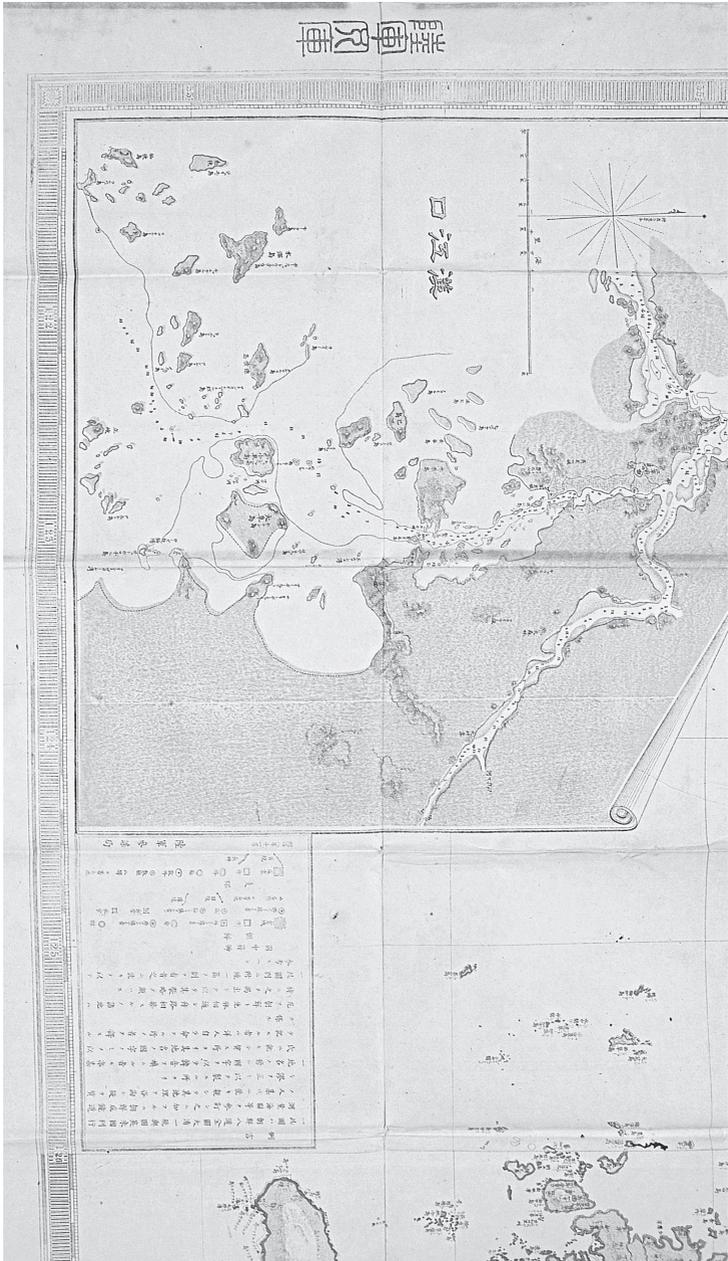


図1：「朝鮮全圖」(明治9 [1876] 年刊)の南西(左下)部分

この部分には「漢江口」(20万分の1)および「例言」が配置されている。(国立公文書館蔵、資料番号：178-487)

Corea, the Hermit Nation の付図 (Map of Cho-sen or Corea、三百万分の一) だけでなく、一八八三年にドイツで刊行された Korea oder Tschosen der Japaner (Gotha: Justus Perthes、百七十万分の一) の元図として利用された。後者はさらに英訳して、Korea or Chosen of the Japanese というタイトルで一八九四年以降に刊行されている。¹²⁾ また、一八八五年に朝鮮半島を旅行した、ロシアのアムール州総督官房付、公爵ダデシユカリアニは、ソウルで入手したという、あきらかに「朝鮮全圖」(明治九年版)である日本製の地図について、「既知の朝鮮地図のうちでは、これが最大で、最も詳細かつ正確な地図なのである」と述べている(井上訳、一九九二、六六頁)。西欧側の地理情報(海図)と朝鮮・中国側の既存地理情報を編集統合して、鎖国状態の継続のため不足していた朝鮮の地理情報をおぎなうものとして、国際的に評価されたことになる。なお、本図が朝鮮国内でどのように受け取られたかについては十分な情報がないが、Griffs (1882, 46) は、その正確さとくわしさで、朝鮮人を驚かせたとしている。

ところで、「朝鮮全圖」は初期にはふたつの小冊子が付属していた。¹³⁾ 一方の『朝鮮全圖附録』は、「朝鮮國八道各管別名録」と題する地名表が冒頭にあり、地名の読み(カタカナで示す)にくわえ、ソウル(漢城)からの里程と所要日数を示している。これに表形式の「朝鮮國京城ヨリ釜山浦迄水陸諸路」、「朝鮮國釜山鎮城ヨリ京城迄ノ里程」、「和漢度量比較表」がつづき、末尾に「朝鮮海按針書抄譯」(航海案内書の抄訳)を付している(全八七頁)。他方の『朝鮮近況紀聞』は、朝鮮全体に関する制度や事情を説明するもので(全五五頁)、末尾には「朝鮮國各管段別石高戸數物産略表」を冒頭に七つの表を付す。この主体は「朝鮮國五衛兵備表」、「朝鮮國八道陸軍兵備表」といった軍事的なものである。ただし後者などは、基本資料を一五世紀の『經國大典』としつつ、江戸時代の対馬藩通詞による『象胥紀聞』で修正したと注記しており、古い資料に頼らねばならなかった事情を示している。

なお、朝鮮についてはほかに「朝鮮江華島圖」がある。大蔵省紙幣寮彫刻局石版部が石版術の「習業」のため印刷したもので、凡例につきのように述べている。

此圖ハ千八百六十七年佛兵此地ニ侵入ノ時中尉ヒユマン氏等測繪シ公刊セシモノヲ摸縮シ訂正シテ製セシモノナリ

フランス艦隊の遠征に際しておこなわれた測量による原図をもとにしていることがあきらかである。

さらに、やや刊行時期がおくれるが、「朝鮮八道里程圖」に言及しておくこととしたい。この図では、八道を全四枚の図に示しつつ、最初の図(黄海道・京畿道・江原道を図示)につきのような注記を掲載する。

本圖タルヤ明治八年出版朝鮮全圖ニ拠リ補スルニ道里標ヲ用ヒ各地ノ距離ヲ記入シ以テ梯尺ヲ用ユルノ煩ヲ省クニアリ然トモ此原圖ハ素ト道里標ニ拠リ製スルモノニアラサレハ圖上自ラ距離ト里数トノ比例ヲ為サ、ル者アルニ似タリ然トモ其何レカ非何レカ是ナルヲ判決スル甚タ難シ故ニ今暫ク改正ヲ加エス他日實地ニ就キ軌正スル所アラントス……

上記「朝鮮全圖」(一八七五年刊、一八七六年改訂)の場合、海岸部については近代的測量による情報がえられても、内陸部については、類似する精度のものがえられない。本図は、その距離の表示に関する欠点を補うために作製されたもので、図に示された各地点間の道路に、距離(朝鮮里)を記入する。また各地点については、漢城(ソウル)からの距離にくわえ、各道の「巡營」からの距離(カッコ内に記入)も示す。この図に示された里数は、さらに詳細な検討を要するとはいえず、「海東輿地圖」(十九世紀前期)に付載する里程表(李、二〇〇五、一四五—一四七頁)の数値に類似することを指摘しておきたい。

以上、明治初期の編集図についてみてきた。すでに東アジア地域で測量活動を展開していた欧米諸国が作製した海図あるいは航路図に依存しつつ、一部については朝鮮や中国の地理情報をくわえていた点が注目される。このような東アジア側の伝統的な地理情報の操作は欧米側にとっては容易ではなく、現地知識人の助力を得ながら編集された「朝鮮全圖」が、西欧側でもひろく参照されるようになったのは、当然のこととはいえ特筆に値するといえよう。

三、台湾出兵関係図

欧米側の地理情報への依存は一八七四（明治七）年の台湾出兵でもみられた。日本の外交顧問として、国際情勢の判断から清国との折衝まで大きな役割を果たしたフランス系アメリカ人、ルジャンドル（リゼンドル、李仙得）は（小林隆夫、一九九四）、他方で台湾の地理情報も提供した。彼は、台湾南部で難破したアメリカ船ローバー号の乗組員が先住民に殺害された事件に関連して、厦門領事としての活動経験をもとに、台湾の地理情報も収集しており、やはり台湾南部で遭難した宮古島民の殺害について、類似の問題に直面していた日本にこれを積極的に提供することになった。中国側の領土観に対して、万国公法的な西欧的領土観を対置しつつ、台湾の東部は清国領でない主張するルジャンドルは、その範囲を明確にするために、先住民のうち「生蕃」といわれた人びとと漢人の居住域を区画する境界を示す地図 (*Formosa Island and the Pescadores, China, 1871*)¹⁴ をすでに刊行していた。一八七二（明治五）年九月に、アメリカ公使デロングが外務卿の副島種臣に提示した、ルジャンドル収集の台湾の地図にこの図が含まれていたことが確実である。¹⁵ さらにルジャンドルは、日本軍の遠征がめざす台湾南部について、自

らの調査ルートを付した地図も提供した。これを翻訳したのが表2の(1)「臺灣南部之圖」(図2)、さらにこのうち長文の文言を省略して印刷したのが(2)「臺灣南部之圖」である。

(1)「臺灣南部之圖」の右上の部分には、この図ができた経過についてつぎのように述べている。

臺灣南部之圖

副島外務卿ノ命ニ因テゼネラルリヂヤンドル製之

此図海岸及高山ノ位地ハ英里海軍所ノ原図ニ基キ其他ニ至ツテハ作者ノ千八百六十七年千八百六十九年千八百七十年千八百七十二年前後四回ノ旅行中見分セシ所ト自身ニ測量セル所ニ係ル
千八百七十二年十一月日本東京ニオイト

作者誌之

またこの図の左下には、遭難者の原住民からの保護をめぐるルジヤンドルと清国側の交渉の過程を記している。

中央に描かれる台湾南端部の地形部分は茶色の線で描かれ、海岸部や湿地については、うすく青で着色する。上記の文言や漢字の地名以外の、地名や説明、通行ルートは朱で記入される。

表2：台湾出兵関係図

	タイトル	作製年月	サイズ(cm)	縮尺	作製機関	所蔵機関、資料番号
1	臺灣南部之圖	1872	94×64	約1/93,000	外務省	国立公文書館、177-0061
2	臺灣南部之圖	1874.4	54.6×37.8	約1/140,000	海軍水路寮	国立国会図書館、YG913-2296
3	臺灣全島之圖	1874.4	65.4×50.8	約1/690,000	海軍水路寮	国立国会図書館、YG4-Z-M-2813
4	臺灣清國属地部	1874.4	28.4×72.2	-	海軍水路寮	国立国会図書館、YG913-2297
5	車城ノ錨地	1874.4	19.6×28.7	-	海軍水路寮	国立公文書館、ヨ558-0086

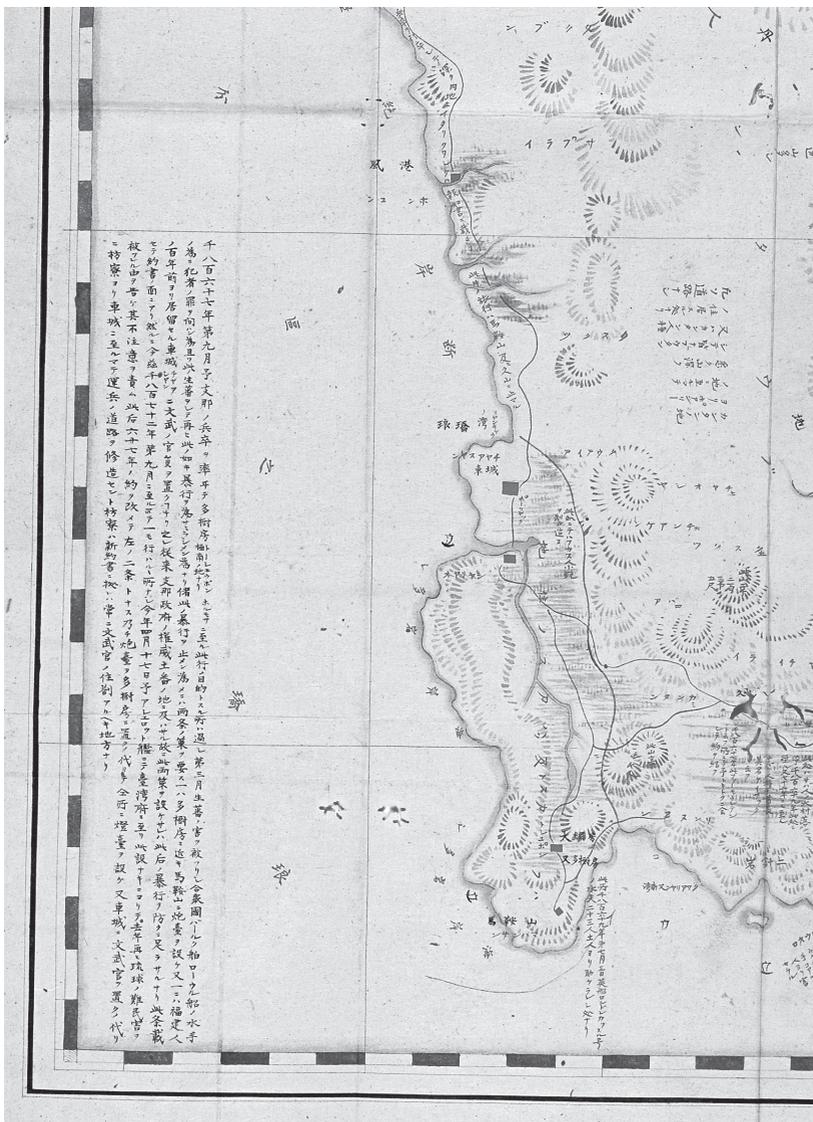


図2:「臺灣南部之圖」(明治5 [1872] 年製)の南西(左下)部分
 この部分には車城をはじめとくに文言が多く、左下にはルジャンドルの交渉過程を示している。(国立公文書館蔵、資料番号:177-0061)

他方、(2)「臺灣南部之圖」は、モノクロの印刷であるが、(1)「臺灣南部之圖」をよく踏襲している。ただし上記右上及び左下の文言は省略されている。また、(1)「臺灣南部之圖」で朱書きになっている文言は、(2)「臺灣南部之圖」の対応部分と共通する場合もあるが、ちがう場合もある。とくに(2)「臺灣南部之圖」の西海岸に位置する車城の部分につけられた文言は、宿営地に適しているとして、現地での活動をあきらかに意識したものである。

以上のような(2)「臺灣南部之圖」は、台湾出兵の目的地に関するもので、これにあわせて「臺灣全島之圖」、「臺灣清國属地部」および「車城ノ锚地」が印刷された。「臺灣全島之圖」は台湾全島のほか澎湖諸島、さらに中国大陸の一部(福建省)を描く海図で、台湾南端部については、「臺灣南部之圖」にみられる文言を簡略化したものがみられる。この海図の原図は不明であるが、内陸部の地形の表現などは、一八五三年のフランス海軍による *Carte de la mer de Chine (Aeune Feuille) Detroit de Formosa* (呂・魏、二〇〇六、一二一―一三頁) に類似する。¹⁶⁾ 他方「臺灣清國属地部」は、中国の伝統的地図を簡略化してモノクロで印刷したもので、台湾島を西側から俯瞰するように描かれている。この場合、遠景は山岳地帯となり、東海岸は描かれていない。山岳地帯から東側は清国側にはコントロールできない原住民の世界と考えられていた。このような地理観に対抗して、ルジャンドルは、西欧的領土観からすれば、台湾の東側は清国領ではないと主張したわけである。

ところでこうした構図は、康熙期や乾隆期の台湾図に共通するが(洪、二〇〇二a、b)、本図は台湾の北部については、一部東海岸(ただし蘇澳湾が南限)も描いているところに特色がある。こうした地域まで描く台湾図は、一九世紀の中頃になると登場しており(王・胡編、二〇〇二、一八二―一八六頁、王主編、二〇〇七、二〇二―二〇四

頁)、その一つを元図としたものであろう。

このようにみていると、西欧的地理観による「臺灣全島之圖」と、中国の伝統的地理観による「臺灣清國屬地部」という対比が明確になる。ただし、王・胡編(二〇〇二、一八八—一九五頁)によれば、一八七三年以降、清国側の図は伝統的地理観によるものにかわって、東海岸も西海岸と同様に図示するもの(「台澎山海輿図」など)が主体になっていくという。そうした点で、遭難者の保護をめぐる国際的対立は、清国側の台湾図のスタイルを大きく変えたことになる。

なお、「車城ノ錨地」は、(2)「臺灣南部之圖」が適当な停泊地として勧める社寮の北に隣接する車城の海岸部を沖から描写する図で、英文とその和訳の文言では目標物や海底の地質について言及する。またこれから、元図が一八七二年に Douglas Cassel (アメリカ海軍少佐で、日本にやとわれて台湾出兵にも参加した「エスキルドセン、二〇〇一」Eskildsen 2005: 199-201) によることもわかる。

四、アジア大陸図

これまでみてきた地図は、比較的大縮尺のものが多かったが、以下では東アジアに関する小縮尺図をとりあげる(表3)。また小縮尺だけあって、軍や政府の関係者が使用するものというより、民間でひろく参照される場合が多かったと考えられる。¹⁷⁾

まず「亞細亞東部輿地圖」は縮尺が三〇〇万分の二で、本初子午線を東京にするとするという特異的な図である。この意図は今後研究に値しよう。東は本州の東端から、西は四川省や雲南省の西端まで、南北は北緯一九度付近〜同四

表3：アジア大陸図

	タイトル	作製年月	サイズ (cm)	縮尺	作製機関	所蔵機関、資料番号
1	亜細亜東部輿地圖	1875	91.1 × 137.2	約1/3,000,000	陸軍参謀局	国立公文書館、265-164など
2	清國沿海諸省	1877.7	99.9 × 64.1	約1/2,500,000	海軍水路局	国立公文書館、ヨ292-0111など
3	清國沿海諸省 (手描き)	1875.12	113.5 × 86.4 (変形)	約1/2,200,000	外務省、河野靈巖	国立公文書館、ヨ292-0116
4	露國版東西伯利亞圖	1881	105.6 × 245.5 (変形)	1/1,680,000	参謀本部翻刻	国立公文書館、ヨ292-0155
5	滿洲全圖	1890.3	131.5 × 144.6 (変形)	1/1,680,000	参謀本部	国立国会図書館、地方図2、アジア3-94
6	滿洲全圖	1894.9	98.2 × 105.0 (変形)	1/1,680,000	参謀本部？	国立国会図書館、大山文庫60-30
7	支那全圖	1892.1	72 × 102	1/6,961,600	参謀本部	国立公文書館、ヨ292-0026

三度付近を图示し、朝鮮半島と中国の主要部分、さらに北海道南端部以南の日本をふくむこととなる。右下の欄には、日本、清国、満洲、朝鮮の地理を順に述べる。またこの欄の上の囲みでは、東京、京都（西京）、大阪の市街図を示す（縮尺はいずれも一〇万分の一）。さらにこの欄の左には、北京市街図（一〇万分の一）、上海市街図（五万分の一）を配置している。くわえて図の左下隅には、広東市街図（五万分の一）もみられる。なお、この図の刊行が明治八（一八七五）年であることは表紙裏に印刷されている。また、この図にみえる北京市街図は上記「清國北京全圖」とは別系統の図と考えられる。

つづく「清國沿海諸省」は、海軍水路局により、一八七七年に刊行されたものであるが、その文言から、原稿は一八七四には完成していた模様である。一八七五年二月には、この原稿を写したうえに、その图示範囲を拡大し、さらに新たな文言が加えられたものが作製されている。これを「清國沿海諸省」（写本）とよぶことにしたい。ただし説明を簡略にするために、一八七七年に刊行されたものから紹介したい。

本図も約二五〇万分の一と小縮尺で、東西は東経一二八度〜一一二度三〇分付近、南北は北緯二一度三〇分付近（同四一度三〇分付近）を图示する。このため日本の領域については右下やや高めのところは沖繩諸島、八重山諸島が图示されるだけである。また朝鮮半島も東半分が图示されない。左上のタイトルの下には、海軍大佐兼水路権頭の柳植悦の説明があり（明治七年一〇月）、地理情報を「英人所著清國沿海圖」、「大清一統圖」（一八六三年）、さらに「對譯英華通商事情誌」（一八六三年）からえたとしている。またその下には、実際に作図にあたった、水路寮出仕の大後秀勝・石川洋之助の説明を掲載する。内陸部については、大河の水系を重視したとしている。この場合、「對譯英華通商事情誌」掲載の水路誌も参照されたと考えられる。また朝鮮半島の南西部海岸については、実測図がないとしており、図に二本の海岸線を描いている。この文言の下には、さらに簡略な「北京城街」図（縮尺約七万七千分の一）を示している。本図は、中国大陸の省を色分けで示すほか水系を青で着色するなど、カラフルな図であり、民間でも歓迎されたと考えられる。

他方「清國沿海諸省」（写本）は手描きではあるが、「清國沿海諸省」と類似する。ただし中央の図の縮尺が大きく、また图示範囲の拡大もあって、ややサイズも大きくなっている。本図が作製された背景は、下部中央にあるつぎの文言に示されている。

原圖ハ海軍省水路寮ノ裁制ニ係リテ蓋シ海陸形勢ヲ悉セシ者ナリ然トモ其諸港ノ在ル所止タ上海鎮江等ノ十三口ヲ載せて獨リ瓊州淡水ノ二港ヲ缺ケリ是レ條約書中載スル所ト名数相契ハサルヲ以テ我外務卿更ニ雪巖ニ命シテ之ヲ補ハシム……今淨圖已ニ成ル便チ繕メテ他ノ諸地圖ト共ニ備フト云フ

明治八年乙亥十二月

外務権少録

河野雪巖

清国と結んだ条約（一八七三年四月三〇日に批准書が交換された日清修好条規と思われる）にしたがってきめられた開港地のうち、瓊州（海南島）と淡水（台湾）が水路寮作製の図に図示されていないことから、この両者を図示することを目的としている。ただし元図には海南島が図示されていないため、図の範囲をその下方および左下（南西）端については西側に拡張している。このため本図の輪郭は逆L字型となった。また本図の台湾の中央には、のちに「蕃界線」といわれるような「生蕃」の居住地とその他の境界を示している。なお、本図には表紙があり、そのタイトルが「大清通商十五口圖」となっているのは、上記のような理由による。

つづく「露國版東西伯利亞圖」は大型の東部シベリア図で、円錐図法により東は東経一五八度、西は同一一〇度、南は北緯四一度、北は同五四度と広大な地域を図示する。何枚かの紙を貼り付けているが、その部分はかならずしも図が整合しない。またロシア製図の翻刻であることが明記される。東南端に北海道を図示するが、その海岸線が正確ではない。なお下部右よりに幅五四・四センチの突き出た部分がある。これは朝鮮の北端部に接する沿海州の南端部を図示するためと思われる。この図が翻刻された背景は不明であるが、つぎにとりあげる「滿洲全圖」と同じ一六八万分の一の縮尺であるのは、基本的に同じ元図によるからと思われる。¹⁸⁾

「滿洲全圖」は二種類あるが、一八九四年版は一八九〇年版の中央部のみを印刷したもので、定価四〇銭とされている点からしても、日清戦争の開戦にあわせて印刷・公開されたものと思われる。以下では一八九〇年版について述べる。

やはり円錐図法により、東は東経一四四度、西は同一一二度付近までを、南は北緯三八度付近から、北は同五四

度付近までを图示し、山地は茶色、水界は青で着色されている。右下に下記のような文言がある。

本図ハ大体ヲ魯版ノ東悉伯里全圖ニ基ツキ沿岸ハ魯英兩國ノ海軍測量圖ヲ以テ之ヲ補足ス其都城及ヒ沿道ノ如キハ概シテ遊歴諸氏ノ報告スル所ニ因ツテ之ヲ取捨記入ス：

参謀本部編纂課

陸軍 屬木下 賢良編輯

陸軍技手堀越恒四郎製図

ロシア製の東シベリア図をに基づきながらも、ロシアとイギリスの海図を使い、さらに都市や交通路については、満洲地域にも派遣されていた陸軍将校のもたらした情報も利用したわけである。なお、編集した木下賢良は陸軍満洲語学生徒としてウラジオストクなどに留学していた。¹⁹⁾

「支那全圖」にうつろう。この図も小縮尺の彩色図で、民間に販売されたと考えられる。関連して注目されるのは、左下の枠外に、印刷出版を参謀本部、発行人を東京市京橋区在住の宇津木信夫としている点である。宇津木は他の地図の発行人もつとめており、民間公開用の地図の販売をひろく引き受けていたと考えられる。この種の地図の刊行が、軍から民間に移行しはじめていたことをうかがわせる。

本図では、チベットをふくむ清国の領土を中心に東側に日本列島を配置する。左下の囲みにはつぎのような文言がある。

本圖ハ大体ヲ英版ノ亞細亞全圖ニ取り旁ラ最近ノ魯版中央亞細亞圖英人金（キーン）氏ノ亞細亞全誌獨逸版萬國圖英版印度圖及支那一統輿圖等ヲ採掖シテ編製セシ者トス其山脈河江ノ如キハ概シテ亞細亞全誌ニ基キ遊歴

諸氏ノ紀行ヲ以テ之ヲ補フ其名稱ノ如キハ一統誌及水道提綱ニ因テ填註スト雖トモ間、亦支那音ヲ以テ譯記セシモノアリ是レ歐人記スル所ノ名稱ニシテ支那誌中ニ之レナキヲ以テナリ

明治廿四年六月 校閲 陸軍編修書記 下村修介

編輯 陸地測量手 松本安四郎

さまざまな情報源を使用しており、中国大陸の偵察をおこなった陸軍将校の紀行文も参照している点は、上記「滿洲全圖」と同様である。またキーン (Augustus Henry Keane「一八三三—一九二二年」と思われる) のアジア地誌の使用、地名の表記の問題など興味ぶかいものがある。なお、この図の校閲にたずさわった下村修介は、一八七七年の朝鮮への使節団に参加するほか (小林・岡田、二〇〇八)、上記木下賢良とともに『滿洲地誌』(支那地誌第一五卷、参謀本部、一九八六) の編集にあたっており、その活動が注目される。

こうした参謀本部が民間に供給してきた編集図は、情報源の増加とともに、徐々に民間の刊行する地図にとつてかわられていったと考えられるが、このプロセスについては、さらに検討する必要がある。近代地図の整備が遅れた東アジアでは、この種の図はまず国家機関によって整備されたことに注目しておきたい。

五、清国分省図

初期編集外邦図に関連してもうひとつふれておかねばならないのは、清国の各省について作製された地図である (表4)。はじめは「清國沿海各省圖」として作製され、「沿海輪廓ハ英國海圖ニ基キ且内部者一統輿圖及道中記等ヲ以テ每省切圖ニ調製」するように指示された²⁰⁾。海岸部を欧米製の海図により、内陸部を当該地域の地図により作

製するという手法は、すでに「朝鮮全圖」や「清國沿海諸省」の場合でみたが、清国の各省図についても適用された。

ここでも内陸部については「一統輿圖」が登場し、旅行記類も参照したとするが、「清國江蘇省全圖」（七〇万分の一）の場合、やはり上記「皇朝中外壹統輿圖」に類似せず、他の地図によったと考えられる。これ以外に元図になったものの候補として、曾國藩・丁日昌撰の「江蘇全省圖」（一八六八年、約一〇万分の一）²¹があるが、よく類似せず、むしろ刊行時期が遅い「江蘇全省輿圖」（一八九五年、清代古地図集／古道編委員編、二〇〇五）に類似することになった。この背景については、さらに検討する必要があるが、元図の特定は慎重にすすめるべきことを示すものであろう。

ところで、清国沿海各省図の対象になったのは、直隸・山東、江蘇、安徽、浙江、福建・広東、広西

表4：清国分省図

	タイトル	作製年月	サイズ (cm)	縮尺	作製機関	所蔵機関・資料番号
1	直隸山東両省全圖	1879.1	144.8 × 116.7	1/700,000	図に記入なし	大阪大学人文地理学教室 292.211CHO
2	(清國) 江蘇省全圖	1879.5	81.3 × 94.5	1/700,000	日本参謀本部	大阪大学人文地理学教室 292.221SANなど
3	福建省全圖	1879.1	116.4 × 98.3	1/700,000	日本参謀本部	国立国会図書館 YG915-26
4	(清國) 廣東省全圖	1879.10	118 × 136	1/700,000	日本参謀本部	国立国会図書館 YG915-24
5	(清國) 湖南省全圖	?	99.0 × 83.8	1/700,000	図に記入なし	国立国会図書館 YG913-2368
6	(清國) 山西省全圖	1887上版	141.9 × 80.1	1/700,000	参謀本部陸軍部測量局	国立国会図書館 YG913-190
7	安南東京全圖	1884	54.2 × 73.8	1/700,000	大日本参謀本部	国立国会図書館 YG913-221

注：直隸山東両省全圖、福建省全圖、江蘇省全圖の刊行年月は、アジア歴史資料センター資料 Ref. C07080130800、広東省の作製年月は、同 Ref. C07080172500 による。安南東京全圖については、『陸軍省年報』第10年報、14頁（龍溪書舎、1990年刊）掲載の刊行年を示す。

の各省であったが、表4に示すように、まだその所在を確認できていないものがある。また湖南省や山西省についても、時期はやや遅いが、類似した様式と同じ縮尺で刊行されたものがあり、さらに探索をすすめる必要がある。くわえて、「安南東京全圖」のように、清国固有の領域外についても同一縮尺の図を作成している。この場合は、地名等からみてフランス作製の図に全面的に依存したと考えられる。

なお、いずれの図でも経緯度を記入しているのは、海図を基本的な枠組として使用したからであろう。また、すべての図についてみられるわけではないが、図の周辺には小さな囲みをつくり、そこに都市図を示している。上記「清國江蘇省全圖」の場合は、「南京江寧府城之圖」（八万五千分の一）、「蘇州府城之圖」（二万六千分の一）、「上海略圖」（五万分の一）を左下に配置している。清代の各省に関する地図作製は、一八八六年にはじまったという指摘がある（礪波、二〇〇七）。このような角度からも、この一群の図を評価する必要があるだろう。

むすびにかえて

本稿の冒頭で、初期編集外邦図は既存の地理情報によることを指摘したが、これまでの検討により、この地理情報の性格が明確になってきた。まず欧米諸国が作製した海図が大きな役割を果たしていたことがあきらかである。欧米諸国の東アジアにおける測量史に関する研究が必要とはいえ、天測を軸とする海図や水路図は、ほぼ正確な海岸線や内陸航路を示し、初期編集外邦図の骨格をつくったわけである。中国大陸や朝鮮半島の内陸部については、両地域の伝統的な地図に依存したが、この骨格によってはじめて、経緯度や縮尺をとまなう、近代的な装いをもった地図が作製できたといえよう。また台湾南端の内陸部のような、清国側の図がないような地域については、ル

ジャンドルの探検的な調査による図が利用されたことも、欧米による地理情報への依存を示すものであろう。

またもうひとつ指摘しておくべきは、『朝鮮近況紀聞』の表の注記が示すように、同時代の情報が入手できず、古い情報で補わねばならないこともあった点である。この時期には、秀吉の朝鮮侵略の際にえられた地図の献納を受けるほか、フランスの宣教師ダレの『朝鮮教会史』（原著仏文、一八七四年刊）の翻訳などがおこなわれたこと（小林・岡田、二〇〇八）もくわえ、鎖国体制の朝鮮に関する情報の乏しさを克服するのは、容易なことではなかったわけである。

ともあれ、このようにして準備された初期編集外邦図により、東アジア地域の地理情報が統合整理されていくことになった。日本陸軍に参謀本部が設置され、中国大陸の偵察と簡易な測量のために若い将校たちが送り込まれたのは一八七九年であった。また朝鮮での同様の偵察と測量は、一八八三年から開始される（小林・渡辺・山近、二〇一〇）。彼らの作製した測量図に、こうした初期編集外邦図の利用が記されることがあるのは、その偵察や測量作業がこれらの地図を基礎にしていたことを示すものであろう。この点もふくめ、さらに初期編集外邦図の探索と検討をすすめたい。なお、これに際して、編集図のもととなった欧米諸国ならびに中国・朝鮮製の地図の探索が必要なのは、あらためていうまでもない。²³⁾

付記

本稿ができるまでには、外邦図研究会の皆様、国立公文書館、国立国会図書館地図室・憲政資料室の係の方にはさまざまなお世話になった。また本稿にむけた研究には、国土地理協会の助成ならびに科学研究費、基盤研究（A）（課題番号、一四二〇八〇〇七および一九二〇〇五九）を使用した。記して感謝したい。

注

- (1) なお、海図については特別の配慮が必要なため、ここでは地図だけをとりあげる。
- (2) 假製東亞輿地圖は、作製後まもなく一般に公開された(一八九四年)。
- (3) 表1、表3、表4の作成にあたっては(佐藤一九九一b、一九九二a)を参照した。
- (4) アジア歴史資料センター資料「[212 外務省より益満邦介於清国買入白川の図代戻入の件] 明治七年二月二日、Ref. C09120246800.
- (5) アジア歴史資料センター資料「渡辺与一郎北京ヨリ田辺太一外九名該地着并公使総理衙門応接云々来翰」明治七年九月、Ref. A03030232500.
- (6) アジア歴史資料センター資料「直隸湾北河総図出版に付届」明治八年一月、Ref. C04026525700.
- (7) ビーズリー(二〇〇〇)では、船名がアクタイオン号、タブ号と、ジョン・ワードはジョン・ウオードと表記されている。
- (8) 『唐土名勝圖會』は近年刊行された北京の古図集にも収録されている(《北京歴史輿図集》編委会、二〇〇五、九九一―一五頁)。
- (9) 国立公文書館内閣文庫、ヨ五五八―〇〇八八―一〇〇.
- (10) 国立公文書館内閣文庫、ヨ五五八―〇〇八八―九八.
- (11) フランス艦隊の図は、国立国会図書館蔵『*Plan croquis de la rivière Hong-Kang ou de Séoul depuis son embouchure jusqu'à Séoul* (72.5 × 104.5cm 日本語タイトル「漢江口ヨリ京城ニ至ル河圖」) ただし印刷図を手書きで模写 [YGA シアーザー(二二八)「アメリカ艦隊の図(ただし一八七一年の遠征の際に測量)は *Approaches to Seoul River* と *Salée River with the Fort Taken by a Force from the Asiatic Fleet* (二) 図をあわせて掲載 646 × 86 cm 日本語タイトル「朝鮮國小陵河口近傍実測圖」] 印刷図を手書きで模写 [YGA シアーザー(二二二)として見ることが出来る。ただし、日本は後者の原図と思われる図を一八七二年にすでに入手していた模様である(アジア歴史資料センター資料、「花房外

- 務大丞外数名差遣」一八七二年八月、Ref. A01000019400 の「丙第壹千八百八十二号」。
- (12) Washington, D.C.: Norris Peters.
- (13) アジア歴史資料センター資料「朝鮮全国同附録同近況紀聞同上(陸軍停年名簿編纂概測刻成届)」明治八年(二月二八日、Ref. A01100105700.
- (14) この図の写真は、國立臺灣立博物館主編、二〇〇七、一三三頁、賴・魏、二〇一〇、六四―六五頁を参照。
- (15) 「壬申九月廿三日外務卿副島種臣米利堅合衆國公使シイテロングえ應接記の内」、外務省編、一九五五、五頁。
- (16) 林(二〇〇九)は、イギリスの一八四五年の測量成果にもとづくとしている。
- (17) 『陸地測量部沿革誌』は「亞細亞東部輿地圖」が「兵要地理日本小誌」の付図、「大日本全圖」とともに好評を博したとされている(陸地測量部、一九二二、七頁)。
- (18) 一六八万分の一の縮尺は一デユイム(〇・〇二五四メートル)で四〇ヴェルスタ(一ヴェルスタは一・〇六七キロメートル)を示すので四〇露里図ということになる(金窪、二〇一〇参照)。
- (19) アジア歴史資料センター資料「加藤績他満洲語学生徒申付等の件」明治一三年四月、Ref. C07080349300 なす。
- (20) アジア歴史資料センター資料「清国沿海各省図製作の方法」参謀本部大日記、明治一二年一月、Ref.C07080084800. なお「清国分省図」という名称は佐藤(一九九二a)によった。
- (21) アメリカ議会図書館地図室蔵、資料番号 G2308 J48 Z3 1868 Vault (LC Control No. 2002626744)
- (22) アメリカ議会図書館蔵「両江楚浙五省行路圖」第一号、砲兵中尉玉井隴虎、明治一六年(資料番号 G7821 P2 S100, T3 Vault) の注記には、「江蘇省全圖」の利用にふれている。
- (23) その一つの手がかりとして、アメリカ議会図書館蔵のルジャンドル関係諸図 (*Formosa Island and the Pescadores*, LC Call No: G7910 1870L3 Vault なす) がある。

参考文献

井上紘一訳、一九九二『朝鮮旅行記』平凡社(東洋文庫、五四七)

- エスキルドセン、ロバート、二〇〇一「明治七年台湾出兵史料について——在台北国立中央図書館台湾分館の収蔵物評価」東京大学史料編纂所研究紀要一一、五三—六〇頁
- 王自強主編、二〇〇七『中国古地図輯録、福建省——台湾省輯』北京、星球地圖出版社
- 王存立・胡文青編、二〇〇二『台灣的古地圖——明清時期』新店、遠足文化
- 小川琢治、一九〇四「日清交戦地方の主要なる地圖に就いて」地學雜誌一六、二六〇—二六四頁
- 外務省編、一九五五『日本外交文書（一〇）第七卷』日本外交文書頒布會
- 金窪敏知、二〇一〇「ロシア軍による日露戦争戦場の地図作製——外邦図研究ニューズレター七、九—二七頁
- 具良根、一九九七「日本外務省七等出仕瀬脇壽人と外國人顧問金麟昇」韓日關係史研究（韓日關係史研究會）七、一一六—一六三頁（韓文）
- 洪英聖、二〇〇二a『畫說康熙台灣輿圖』台北、聯經
- 洪英聖、二〇〇二b『畫說乾隆台灣輿圖』台北、聯經
- 國立臺灣博物館主編、二〇〇七『地圖臺灣——四〇〇年來相關臺灣地圖』台北、南天書局
- 小林 茂、二〇〇六「近代日本の地図作製と東アジア——外邦図研究の展望」*E-journal GEO*（日本地理学会）一（一）、五一—六六頁
- 小林 茂、二〇〇九「『外邦測量沿革史 草稿』解説」『外邦測量沿革史 草稿』解説・総目次」不二出版、三一—二七頁
- 小林 茂・岡田郷子、二〇〇八「十九世紀後半における朝鮮半島の地理情報と海津三雄」、待兼山論叢 日本学編（大阪大学文学会）四二、一—二六頁
- 小林 茂・渡辺理絵、二〇〇九「近代東アジアの土地調査事業と地図作製——地籍図作製と地形図作製の統合を中心に」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域——外邦図』へのアプローチ』大阪大学出版会、二四六—二五五頁
- 小林 茂・渡辺理絵・鳴海邦匡、二〇〇九「アジア太平洋地域における旧日本軍および関係機関の空中写真による地図作製」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域——外邦図』へのアプローチ』大阪大学出版会、二二八—二四五頁
- 小林 茂・渡辺理絵・山近久美子、二〇一〇「初期外邦測量と日清戦争」史林（史学研究会）九三（四）四七三—五〇五頁

- 小林隆夫、一九九四「台湾事件と琉球処分（Ⅰ）（Ⅱ）」政治経済史学三四〇、一一一六頁、三四一、一三三—三三二頁
 参謀本部、一九八六『滿洲地誌』国書刊行会
- 崔書勉、一九七八「日本外務省御雇外国人『金麟昇』について」韓七（六）、九四—一一二頁
- 佐藤侑、一九九一a「陸軍参謀本部と地図課・測量課の事績—参謀局の設置から陸地測量部の発足まで、1」地図（日本国際地図学会）二九（一）、一九—二五頁
- 佐藤侑、一九九一b「陸軍参謀本部と地図課・測量課の事績—参謀局の設置から陸地測量部の発足まで、2」地図（日本国際地図学会）二九（二）、二七—三三頁
- 佐藤侑、一九九一c「陸軍参謀本部と地図課・測量課の事績—参謀局の設置から陸地測量部の発足まで、3」地図（日本国際地図学会）二九（四）、一一—一七頁
- 佐藤侑、一九九二a「陸軍参謀本部と地図課・測量課の事績—参謀局の設置から陸地測量部の発足まで、4」地図（日本国際地図学会）三〇（一）、三七—四四頁
- 佐藤侑、一九九二b「陸軍参謀本部と地図課・測量課の事績—参謀局の設置から陸地測量部の発足まで、5」地図（日本国際地図学会）三〇（四）、一五—二六頁
- 佐藤侑、一九九三「陸軍参謀本部と地図課・測量課の事績—参謀局の設置から陸地測量部の発足まで、6」地図（日本国際地図学会）三一（二）、二八—四六頁
- 清代古地図集／古道編委会編、二〇〇五『江蘇全省地図』西安地圖出版社
- 測量・地図百年史編集委員会、一九七〇『測量・地図百年史』日本測量協会
- 趙榮・楊正泰、一九九八『中国地理学史（清代）』北京、商務印書館
- 磯波護、二〇〇七「中国の分省地図—陝西省図を中心に」藤井讓治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像、絵図・地図が語る世界』京都大学学術出版会、四二五—四四七頁
- ピースリー、W・G「衝突から強調へ—日本領海における英国海軍の測量活動（二八四五—一八八二）」木畑洋一ほか編『日英交流史一六〇〇—二〇〇〇、1、政治外交1』東京大学出版会、九九—一二二頁

- 《北京歴史輿図集》編委会、二〇〇五『北京歴史輿図集、第一巻』北京、外文出版社
- 頼志彰・魏徳文、二〇一〇『臺中縣古地圖研究』臺中縣、臺中縣文化局
- 陸地測量部編、一九二二『陸地測量部沿革誌』陸地測量部
- 李燦著、楊普景監修、山田正浩・佐々木史郎・渋谷鎮明訳、二〇〇五『韓國の古地圖』ソウル、汎友社
- 林春吟、二〇〇九「台湾出兵から日清戦争までの日本製台湾地図に関する一考察」地域と環境（京都大学人間・環境学研究科）八・九、四三―五四頁
- 呂理政・魏徳文主編、二〇〇六『經緯福爾摩沙——一六一―一九世紀西方人繪製臺灣相關地圖』台北、國立臺灣歷史博物館・南天書局
- 渡辺理絵・山近久美子・小林茂、二〇〇九「二八八〇年代の日本軍將校による朝鮮半島の地図作製—アメリカ議会図書館所蔵「図の検討」地図（日本国際地図学会）、四七（四）、一―一六頁
- Eskildsen, R. ed. 2005. *Foreign Adventurers and the Aborigines of Southern Taiwan, 1867-1874: Western Sources Related to Japan's 1874 Expedition to Taiwan*. Taipei: Institute of Taiwan History, Academia Sinica.
- Griffs, W.E., 1882. *Corea, the Hermit Nation*. New York: Charles Scribner's Son.
- Pascoe, L.P. 1972. The British contribution to the hydrographic survey and charting of Japan: 1854 to 1883. Shoji, D. (ed.) *Researches in Hydrography and Oceanography in Commemoration of the Centenary of the Hydrographic Department of Japan*. Tokyo: Japan Hydrographic Association, pp. 355-386.
- Seymour, W.A. ed. 1980. *A History of the Ordnance Survey*. Folkestone, Kent: Dawson.

（文学研究科 教授）

（文学部 卒業生）

（山形大学農学部 准教授）

SUMMARY

The Maps of East Asia Prepared by Japanese Military during the First Half of the Meiji Era

Shigeru KOBAYASHI, Satoko OKADA and Rie WATANABE

After the Meiji Restoration in 1868, Japanese military started the preparation of maps of East Asian countries. In the first stage, it depended heavily on the geographical information from foreign countries, because of the long national isolation during the Tokugawa period. Some maps from foreign countries were duplicated, whereas the other ones were compiled on the basis of traditional Chinese and Korean maps in combination with modern maps and charts made by Western countries. Accompanying longitude and latitude derived from modern maps and charts, the latter ones seem to be surveyed drawings in appearance.

The authors classified these maps into four groups. The first is those made in early stage. Most of them were duplication of maps and charts of China made by Western countries with place-names written in kana and kanji converted from alphabet. However, one map of Korea and its sequel were compilation from Korean and Chinese maps and British and the US. charts. It is noteworthy that this map of Korea was reproduced in Germany and in the United States converting the place-names to alphabet in order to fill the demand for geographical information of this seclusionist country.

The second group is the maps prepared for the Japanese expedition to Taiwan in 1874 and includes the Japanese translation of the map of its southern end provided by the US. diplomat, Charles Le Gendre. The third is maps of the Asian continent drawn on a small scale. Most of them were compiled from maps and charts of various countries and put on the sale. Provincial maps of China compiled from Chinese maps and British charts constitute the fourth group.

Japanese army dispatched young officers to China since 1879 and to Korea since 1883 in order to survey the central places and main routes. Their field trips and surveying were carried out on the basis of some of the maps examined in this paper.

キーワード：地図, 中国, 朝鮮, 日本軍, 明治期